

けんだんこがしら  
検断小頭

くのみつりへえ  
国光利兵衛の答弁

(下)

吉田 紗美子

烈日のもと、裁かれる利兵衛はすっかり奉行を見あげて陳述を続けていった。

「その九日夜、私は岩津琢磨方へ出向きましたが、折あしく琢磨は遠方に往診にいつて不在でありましたため、用は果せませんでした。

翌日の十日のしらじら明けのころ、奉行所よりの仕丁しちやうが私方へまいり、ただちに奉行所へ出頭せよ、ということでありました。続いてまた別の仕丁が、浜崎の牢へ私を呼びにいつたが不在であったゆえ、と、私方へやってきました。奉行所から仕丁がくるこの形は、公用であります。

よほど火急の用向きと急ぎ奉行所へ罷りですと、中川奉行様は手文庫のなかから一葉の紙片をとりだされ、『そこにある薬味の二品、調合のうえ差しだすよう琢磨に伝えよ』と

仰せられました。

その口調はこれまでのような打診でなく、もはやあきらかに命令で、いよいよご家老様方の意見一致をみたのだと、私は直感いたしました」

琢磨がなんと拒んでも、徳山城下には御殿医をはじめ十二人も医師がいる以上、そのなかの一人に問えば毒殺に要する薬味二品をあげることぐらいたやすく、中川奉行がその医師に調合を命じず、やはり琢磨を名指したのは、この計画を、奉行―利兵衛―琢磨の三人のみに絞っておこうとしたのであろう。

利兵衛が、局面が動きはじめたのを感じながら、琢磨宅にゆくと、琢磨は紙片を一目見るなり、

「私はかような薬味はきいたこともなく、また、何に使う

のかも知りませぬ。ただ、調合せよとのご命令なれば調査だけはいたします」

「いい、「ただし、私が常時このような薬味を所持しているわけはございませんから、薬種問屋に買いにゆかねばなりません」と、城下に一軒だけある薬種問屋の名をあげた。利兵衛がうなずくと、琢磨はすかさず、

「むろん、小頭どのも同道いただけるのでありましような」といった。

万々に備えて利兵衛を証人にしようとするのであった。

薬種問屋から戻ると、琢磨は薬研でも使うのか小さな音をさせたのち、「では、たしかに調査いたしました」といって、骨張った手が一包みの薬包をつきだした。

利兵衛がまじまじと琢磨の眼をみつめると、琢磨は目をそらし、お互い知らぬ顔をしようではないか、毒を調査せよといわれれば断らぬわけにはゆかぬが、この二品を調査せよとのことなれば、それが何になるものやら我らは知らぬ、命令通りに動いたとなれば、後日、出る所へ出たとしても責任は免れるであろう、と、利兵衛の暗黙の同意を求めて、琢磨の目は落ちつきなく瞬きを繰り返した。

利兵衛はともかく奉行所へ引きかえすと、その忌わしい包みを奉行の前に置いた。

「中川様には大儀、大儀とそれは上機嫌にて、『今日昼餉どき、酒に混じて早速試みるよう番士たちに申しつけよ』と、

仰せられるではありませんか。

急転直下の成りゆきに私大いに驚き、

『今日……今日すぐでありますか』

と問い返しますと、

『知れたこと。早いほど良いではないか』

『ご命令ではありませんが、今までかやうの先例はございませんから、恐らく番士たちもお受けいたしますまい』

と反対したのに、お奉行様はそれをどう受けられたのか、

『ん、では、その方に何ぞ妙案があるか』

と仰せで、その口調の狎れなれしさには、いんそ、ごつとするものがありました。私はよるこんで毒殺に加担するのではない、そのことを、言葉であれ、身振りであれ、断平としてこのお奉行に告げねばならぬと、冷汗に塗れて不器用に言葉を探しまわり、唇をひきつらせてやっとの思いで、私は申しました。

『いや、さようなことではなく……私の申したきことは、どれほどの極悪人に対しても毒殺は恥ずべき手段であり、天人ともに許さざる非道であり、不正義のなかでもっとも隠微かつ穢多けがれい不正義……なんとゆうてよいかやうわかりませぬが、つまり、これは、してはならぬことであります。いかに自分を駆りたてても、お受けしてはならぬ、の気持の方が強いのでございます。私にはとうてい、このお役目お受けできません』

『ほう』

お奉所様の一言は、じつに含み多い口調でありました。その眼に浮んでいるのは、庭で餌を啄んでいる鶏が突然、人語をしゃべりだしたのを見るような興味だけでありました。そして、片手を火桶にかざして冷笑すると、

『奇妙な理屈を聞くものよ。元来、その方は罪人を処刑いたす検断職ではないか』

といわれますので、

『それは、悪事を犯した罪人には刑罰は当然のこと。しかしこの件は、お預かり以来ただ一回の取り調べもなく、従って罪状もなく、御法に照らして刑死を賜うのでもありません。ただ闇から闇へ、牢から棺へと、囚人を消してしまおうのではありませんか、思うだに怖いことでもあります』

『む、表向き死刑を賜う要人ではあるが、その方も存じおる通り当節政治事情、いかにも複雑変転烈しく、この際、公然と斬罪に処しては奇兵隊を刺戟して面倒ゆえ、囚人は衰弱のあげく獄中病死した、とすればもっとも穩便に事はすむ。ゆえに、囚人は病死させねばならんじゃ、わかったか』

それはそっちの勝手な理屈じゃ、と私は、  
『ならば病死はよいとしても、毒殺すれば、遺族に死骸引きわたしの際、たちまち露見いたしまする』

『では、死体を隠せ』

『それでは、病死といえませぬ』

『腐れ頭めが。伝染病にかかったゆえ、即刻火葬に付した、といえばよいではないか』

あつ、なんと悪知恵の働くお方か、と、私は腑抜けのような顔をしてお奉行様を見返しました。

その一瞬で、私の必死の反抗も腰くだけとなってしまいました、服従に馴らされた者の反抗は、容易なことではありませなんだ』

もうすでに眉間に豎皺を刻み、いらいらと唇の端をまげていた中川奉行は、かような愚鈍の者相手に多忙な時を潰したと、上体をまっすぐに伸ばした。

「何を言いたいのか。」

その方、先達てより奉行に向って身の程も弁えず無礼の申しようを重ねておるが、この奉行の命令はご家老の命令、ご家老の命令はすなわち殿御一人の御命、ということをお忘れか。この命令をお受けするか、それともお受けせぬなら御役御免のうえ入牢いたすか、いま、この場において、しかと返答せい。

そう叱咤されると同時に、利兵衛は体の芯が反射的に萎縮してしまい、体は文字通り畳の上でとび跳ねるようにして、平伏した。

「馬鹿者めが。番所へ帰れ。その上で早々首尾を報告せい」  
利兵衛の頭上にさらに奉行の悪罵が降り注いだ。

浜崎の詰所では、いつも通り番士たちが炬を囲んで詰めて

いた。利兵衛はそのなかから老いた兼五郎の顔を探し出して、呼んだ。

「昼にこれを。酒に混じるとよい、ということであった」  
ことさらさりげなく言ったが、兼五郎は掌にのせられた薬包紙をみると、さっと当惑の表情を浮かべた。

「それはまた、えらく急な話で……」

「お奉行の命令でな」

「……酒は、なんと理由をつけましようぞ」

「それは、その方たちが計らえばよいではないか」

兼五郎にむかっていう利兵衛の口調は、そっくりそのまま、中川奉行の口調であった。加えて、牢番どもが上役である自分の命令に従わないのを見るにつけ、しだいに苛立ちが募り、「もう決ったことなのじゃ、その方どもがなんと不服を申し立てても、どうなるものでもないわ」と憎にくしげに言い放ち、最後に駄目押し、「ぐずぐずするな、お奉行は首を長くして報告を待っておられる」とたたみかけ、相手に物言う隙をあたえず、ずっとその場を離れる呼吸まで、なにからなにまで中川奉行に酷似しているのだが、利兵衛は気付かない。

牢内見廻りに出た利兵衛は、順に囚人を覗いていった。

目下、この浜崎の獄に在るのは政治犯のみ十四名、新規の囚人は収容しない。

本牢一番 本城清。相牢だった乱暴者の庄助が出ていったあとは話し声も聞えず、清は牢奥でひっそり身を潜めている。

本牢二番 空き。ここにいた井上唯一と河田佳蔵が昨秋に処刑されて以来、鍵があげられることはない。

揚り屋の浅見安之丞の牢の前で、利兵衛は足をとめ、「変りありませぬか」と声をかけてから、どきりとした。自分が毒殺しようとしている相手に、変りありませぬか、とは白じらしい、なにを言っているのだ、と混乱したが、安之丞はいつもの世間話と取ったのか、

「冷えるのう、まだ春には遠い」  
と答えた。

酒を……といいかけて利兵衛はとっさに、いけん、酒のことなんぞ言うちゃいけん、けど、昼に出る酒を飲まんように告げる方法はないものか、と思ひ乱れて、牢格子の前に佇んだ。安之丞は牢格子の内側まで膝行してきて利兵衛を見た。利兵衛は張り裂けるような瞳をして安之丞を見下した。安之丞の瞳に問うような色が動いた。利兵衛の手は牢格子をつかんだ。だが、なにも言えなかった。

その十日はすぎた。

もう今日は十一日になっている。

利兵衛は詰所にはゆかず、家で番士たちの報告を待っている。朝餉もすみ、目の前ではささのが繕い物をはじめ、姉き

よの機音も単調に続いている。時折、庭の沓脱石の模様が囚人の吐いた血嘔吐に見えたりしたこともあったが、それは妄想というものらしく、家内はしごく平穩無事である。

ささのには、何をするでもなく、ぐずぐず時を過している利兵衛が目障りでならないらしく、ついに問うた、「今日は非番でありますか」。

「いや」

「では、お支度を」

ささのが袴をつきつけるので、利兵衛は仕方なくそれに足をつっこんだ。

利兵衛が詰所に着いたのは、夕刻に近いころ、炉端で鉄瓶は湯気を噴き、番士たちの人いきれでむうっとする詰所は、いつも通りの空気である。

「どうじゃ」

利兵衛が声をかけると、番士たちはぴたりと私語をやめ、声を揃えて答えをかえした。

「異常ありません」

その声まで威勢がよい。

なぜ異常がないのだ、と不審になった利兵衛はみずから牢内を見廻ったが、どの囚人も短い応答を返して、たしかに異常がない。

変事は起っていないかった……。

おもわず利兵衛が安堵とも失望ともつかぬ深い吐息をもら

して見上げると、この日の夕焼空は利兵衛の懊悩を嘲笑するかのように、真紅に染まった雲が天空の涯まで華麗にたなびき、冬の一日の静かな終りを告げていた。

翌日もおなじく。牢内、病死者の届けは出てこない。

利兵衛は兼五郎を呼んだ。自分の与かり知らぬところで番士たちの間で何かが行われたのではないかと、問いつめる利兵衛の眼は、しぜんに鋭さを増している。

「兼五郎。なにも異常がないではないか」

兼五郎はだまって突っ立っている。

「待て、と申すに。まだ話は済んではおらぬ。いったい、あれはどうなったのだ」

利兵衛が声をひそめて問うと、兼五郎は重い口を開いて、「よきに計らえと仰せられましたので、よきに計らうたのでございます」

「と、申すと」

「あの内、少々を酒に混じて進ぜまして、大半は取り捨てました。勝手な振舞いをいたしました、なんともはや、恐れ入り奉ります」

そういうと、兼五郎は上り框に腰をかけた。そうしてやおら腰の蓑入れを引きぬくと鈍豆煙管に刻みをつめ、さも美味そうに一服、ぶくりとふかした。

その、ふてぶてしいともみえる兼五郎の態度は、この仕事が始めてでないのを物語っていた。「以前にもあったのか」

と利兵衛が問うと、「私は小頭様の生れぬ前からこの仕事をやっております。長い間にはいろんな殺しを見聞きいたしますので」と、齒の欠けた口でうっすら笑った。

利兵衛が身をのりだすようにして、

「で、三名とも飲んだのじゃな」

と念を押すと、兼五郎は肯いた。

「たしかに飲んだか。その方もも、たしかに見届けたのじゃな」

「はい。お上のご命令通りにいたしました」

と兼五郎は言ったが、その口調にはどことなし忍び笑いしている気配がある。

しかし、と利兵衛は思いとどまった、これ以上の詮索はせぬのがお互い身のため、というものであった。毒殺は、利兵衛のみならず番士たちさえ忌み嫌う手段なのである。

その夜、利兵衛は早速、報告した。

「番士たちには事情を伏せ、私独断にて酒に毒を混じ、昼食時に飲ませるよう申しつけておきましたが、今日になりましても全員別条なく、いかにも不審の次第であります」

このとき、中川邸は人の出入り尋常ならず多く、応待する中川奉行は気がせいしているためか、「琢磨奴は、薬の調合も満足にできぬのか」と吐きすてるようにいったのみであった。

それ以上深くは追究がない様子に、利兵衛がほっと気を弛めたとたん、奉行はすさまじい凝視を利兵衛に注いできた。

琢磨、利兵衛、牢番の三者が共謀したのではないか、の疑念であった。巧妙な陳述をして奉行を欺き了せたと得意になっている罪人ほど、この凝視にあうと動揺し、あらぬことを口走る。代々の奉行の傍でそれを見てきた利兵衛であるのに、いまはまともに奉行の眼がみられず、ようやく奉行が、退れ、と手をふったとき、真実、虎口を逃れたような気分であった。

「当日、毒酒をのんで牢内病死者のなかった真相は、次のように聞き及んでおります。

その日の昼、本城様は差し入れの酒盃をみて、おたずねになりました。

『なんのための酒であるか』

『お殿様より賜りました酒にございます』

と、その番士が偽りますと、

『そんなはずはない。わが藩では、獄中の者に君公より酒を賜うを禁じておる』

御法にあかるい本城様は教えるようにそう申されます。若い番士はぐっとつまって、

『その、今日は政事初めの日でありますゆえ、特恩じゃと、小頭どのが申されました』

いいながら震えがとまらないのを見た本城様は、『さようか』と盃をうけとって口をつけ、あと取り落されました。

浅見様は盃をもったまま、しばらく迷っておられました。結局、懐へ流しこまれ、信田様もおなじようになされた、と

の報告でありました」

「お館でにわかには四ツ切りの警鐘が鳴りひびき、家臣、総登城の呼集があったのは、まさにこの、毒殺失敗に終った日の夜のことであります」

「いよいよ利兵衛の陳述は、三名の囚人処刑の詳細にふれようとしていた。

徳山藩兵は世子（若殿）をいただき、奇兵隊が占領する西の小郡めざして押しだしていったが、しかし、一刻もたたぬうち伝令の早馬が持参した豎紙（命令書）には、「先鋒 苦戦」と告げてあり、さらに五十名の援兵が武器を鳴らして街道を西に急行していった。そのころには砲弾の鈍い地響きがたえまなくつたわり、焼き払われた民家の炎がすぐ間近に夜空を焦がして、じつに不穏の一夜であった。

一夜あけると、てんでに敗走してきた藩兵は、奇兵隊の勢いあたるべからず、とても太刀打ちできる相手ではない、と口ぐちにいった。徳山は、風前の灯であった。

政府は、隣国の岩国藩に援兵を乞い、宇和島藩にも使者を送り、九州筑前諸藩にも、奇兵隊を背後から鎮圧するよう要請し……と、八方手を尽しているうち、奇兵隊に山口への街道をおさえられてしまった。

そうなつては山口とは連絡がとれぬ。これまで日に八遍、早馬を往復させて山口の宗藩俗論政府の指示を仰いできた徳山政府は、もう為す術をしらず、混乱の度を深めてゆくばかりである。

小郡から進軍してきた奇兵隊が、隣といっているほど近くとんだの宣田に布陣した、との噂が流れた十四日夜、亥の四ツ時（午後十時）、中川奉行の呼びだしをうけた利兵衛はすぐ起きあがった、ここ数日、着のみ着のまま仮眠する日が続いている。

戸外はまた吹雪。

提灯の火は明滅してすぐ消えるので、利兵衛は無灯の提灯をさげて急いだ。お館に近い中川邸では、門前に篝火をたき、武装した一小隊の兵が警戒にあたっている。

座敷にはすでに、同役の寛又四郎も坐っていて、二人にむかって、

「中川様、ご登城前にて立ったるまま、開口一番、

『例の獄中三名の者、今夜中に手段は問わぬ、いかようにも取り計らえ。どうでも生かしておいてはならぬ。その方も、今からただちに相勤めよ』と、仰せられました」

奇兵隊が同志奪回になだれこんでくるまでに、囚人を殺害しようというのであった。

それをきいた寛又四郎は一膝すすめ、

「私奴はもはや六十余歳にも相成り、かようのお役目を勤

めますことははなはだ困難でございますゆえ、どうか壮年の方へお申しつけくださいますよう」

と、表情も動かさず断った。

それは年寄りのあつかましさからではなかった。

明日にも奇兵隊が徳山を占領し、俗論政府を滅ぼすかもしれぬという状勢なのに、誰が三名を処刑するという火中の栗を拾うものか、できればその役目から身を躲したい、それが又四郎の真意である。

利兵衛もすぐ、それを理解した。しかし、こうしたお役目はかならず二人一組で勤めるのがきまりで、単独で見届けることはない。「寛どの、年齢としのことなど言いたててのご辞退は身勝手というものじゃ。それが通るものならば、私もぜひにお断りさせていただきます」と、利兵衛もいった。

「中川様は、この私ども二人のやりとりを聞く耳もたぬといらいらして、『ぐだぐだ際限きりもないことを申すな。もう一人、脇田がいるではないか、文左衛門に立会えと申せ。今から文左衛門を呼びよせては手間取るゆえ、利兵衛、その方、脇田方へ立ち寄ってその旨つたえ、二人して直ちに勤めよ』と、外へ出て馬上の人となられるが早いか、お館めざして馬を駆ってゆかれました」

それを見送り、傍若無人に大きなくしゃみを一つした寛老人は、「では、あとはよしなに」というが早いか、さっさと行ってしまった。

脇田文左衛門宅は西の組屋敷、南北に長い建物の一番北にあり、雪塗れになって辿りついてみると、生憎、不在であった。今夜のことにはならぬかと考えつつ代々小路だいたじょうちを下っていると、「どこへゆかれる、この夜更けに」と声がした。利兵衛が笠をもちあげて立ちふさがっている人影をたしかめると、それは、当の脇田文左衛門であった。

「やはり、会うてしもうたか」

利兵衛の独り言に、脇田は「なにか、面倒でも……」とたずねた。

「じつは今、お手前ところからの帰りで」と、獄中の三名を今夜中に始末するよう、お奉行から命じられた、というと、文左衛門は険しい顔色になった。

「翫なぶってもらっては困る。あの三名の者の処遇はそもそも最初の、私の関わるところではなかった。それをこの土壇場になって、暗殺という一番厭な役目を押しつけられるとは、迷惑千万というものです」

「お奉行は寛どのを呼ばれていた。だが、寛どのがお断りしたので、お手前にお鉢がまわったのじゃ」

「それなら私も、お奉行にお断りしてくるまで」

文左衛門は利兵衛を押しつけて歩きだそうとしたが、利兵衛は道の真中で動かず、

「脇田どの、なんといても、もう無駄じゃ。するしか、あるまい」



そうして利兵衛は、見るみる足元を埋める雪から足をひきぬきながら、「……いやな夜じゃな」と呟いた。

「しかし、寛どのに脱けられては困る……」

その一言で、脇田も、検断小頭三名ともに暗殺の責任を分かちあうべきだ、と考えているのがわかった。

若い文左衛門は俊巡しなかった。先に立って寛老人宅につき、合羽を脱いだばかりの老人を、有無をいわせず引っ立てるようにして連れ出した。

三人が浜崎へ着いたのは、深夜すぎ。

硬張った表情の検断三人が揃って入ってきたのをみて、番士たちに緊張が走った。

「他の者は」

「ただいま、見廻り中であります」

文左衛門はそれをきくと番士たちを見廻してから、最近に増番した番士のすべてを浜崎台場の防備にまわすと告げ、ただちに去らせた。あとに残ったのは、以前からの古顔の牢番ばかりである。文左衛門はさらにその中から兼五郎を含めた八名をえらび、「今から、御用じゃ」といった。

文左衛門が羽目板の壁から牢の鍵を三つ、音をたてて外した。利兵衛は残った番士に、縄と鍬を用意させ、獄舎の門前で待った。

その間に文左衛門は大股に本牢一番めざして近付くと、提灯を牢格子にさしつけて大声で呼ばわった。

「本城清。その方、さきほど奉行所よりのお達しにより、特に死一等を減じて馬島遠島となす、と相決った。これよりただちに馬島へ向う。出ませい」

本城清の返事は少し遅れて返ってきた。

「遠島となす、といわれるか。」

官命を伝うるにはかならず君公の使者が為す、と定められておる。小頭どのに、君命を伝うる権限はない、はず」

文左衛門は一瞬、怯んだ。

「……君公の使者は馬島で待っておろう。早々、出ませい」

文左衛門は身を脇に寄せ、後に控えている番士たちの姿がよくみえるようにしてから、牢の鍵をあけた。

本城清は痩せこけた身体に囚衣一枚という姿であった。提灯の火に浮かんだ顔は蒼白になっていた。

同じようにして、浅見安之丞、信田作太夫も牢から出された。

三人の囚人、三人の検断、八人の牢番の一行は、それぞれ前後を見廻しても誰の姿も見えぬほど距離を置いて、吹雪のなかを海辺にむかって歩いた。先頭は、本城清である。

海は風に煽られて白い泡を囓んでいた。さだかにはみえぬ闇の沖合に黒く横たわる島が、流刑地の馬島である。しかし、そこへゆく渡し舟など、どこにも待ってはいなかった。衰弱した本城清は砂に足をとられて幾度も膝をつき、小突かれては立ちあがって、よろめきつつ進んだ。

背後で利兵衛も、砂交りの風が吹きつけるため眼もあけて  
いられず、ただ轟々と唸る海の氣息をききながら一歩一歩、  
砂をふみしめてゆくより他なかった。昔、利兵衛の子供たち  
が幼かったころ、ここには潮干狩にきた、夏には小舟をだし  
て釣りもした、この荒涼と人を拒む海岸が、あのころ光りに  
満ちていたおなじ新宮の浜辺なのだろうか。

ずいぶん遠くまで歩いた。

お浜蔵の灯りももうみえなくなっている。

「こちらでよい」

文左衛門は無造作にいった。

清は黙したまま砂に坐った。首に縄が巻かれ、文左衛門の  
合図で番士は手に力をこめた。声にならぬ粘った絶息の気配  
があった。だが縊ると、死ぬまで長くかかる。番士がやっと  
縄を放すと、清は前のめりに倒れて砂に顔をおしつけた。絶  
息をたしかめた文左衛門は、後方をすかしてみて、「次」と  
呼ばわった。

そんなふうにして砂の上に三つの死体が横たえられるのを、  
目をそらさず一部始終みていた利兵衛は、「これは殺人じゃ。  
そうとも、立派な殺人じゃ」と、胸の中でしだいに大きくな  
る声に耳傾けていた。

番士たちは穴を掘りはじめた。深く掘らねばならぬ。しか  
しあまり深く掘ると、海水が湧いてくる。番士が場所をえら  
ぶ間中も、それしか念頭にか算老人は、水漬をすすり、

足踏みしながら、「寒いのが、やりきれんのが」と、おなじ  
言葉で愚痴ってとめどもなかった。

やがて、本城清を出来た穴におろし、砂を埋めもどし、後  
日の証に流木をつきさして目標とした。浅見安之丞も、少し  
はなれた場所に埋めた。信田作太夫だけは、大たぶえの浜ま  
で運んで埋めた。

三人の検断と八人の番士の一行は、言葉もなく帰路につい  
た。なんの故か歯の根もあわぬ恐怖に駆られ、風雪に逐われ  
て前屈みになり、現場を立ち去る殺人者のようにひたすら急  
いだ。あるいは鍬を肩にあるいは丸めた縄束をさげた異形の  
群が、吹雪の中から現れて飛ぶように通りすぎてゆく光景は、  
まるで魔物の列としかいえないようなものであった。

亡霊のような顔をした十一人が詰所にもどってきたとき、  
居残りの番士たちは顔色をかえた。処刑のあとはいつもの読  
経があり、酒が振舞われる。居心地悪そうにしていた留守番  
の番士たちは、それがすむと早々に引きとってゆき、文左衛  
門と算老人も、後事を利兵衛に托してかえっていった。

若い番士は恐怖のあまり、「この手が、縄を……」と自分  
の手をみつめ、「ただではすままいぞ。無念さだけででもあ  
の穴から這い出して来らるるわ」と震えた。そうきくと迷信  
深い番士たちは、最後に死亡を確認したときの、提灯の灯に  
照らされた血漬をたらした死相をおもいだし、いっせいに牢  
の方をふりかえた。牢は黒く口をあけてまだ人が居るよう

にみえる、人というよりは怨念の塊かもしれなかった。

利兵衛はくどいほど念を押した、「今夜のことは、口が裂けても口外することはならぬ、わかっているような」

皆も硬張った表情でうなずいた。

すると、その言葉に冷水をぶっかけるように兼五郎がいった、「もうじき節分じゃ。あのままでは、そのうち、犬が掘り返しましょうぞ」。

暖かくなれば、死体が臭ってくる。

人目につかぬようにするには、死体をさらにどこかへ埋め代えなくてはならぬというのか、悪事を隠すためにさらに悪事を重ね……まこと悪事の連鎖は途切れ目もないのだな、と利兵衛は凍りついたような目をして、糞をふかしている兼五郎を見た。

述べてきた利兵衛の口調は、ここで一転して苦々しく変わった。

「報告は、<sup>あけ</sup>暁六ツ（午前六時）にお奉行様に相済ませました。御目付の方へもつたえておく、とのことでしたので委細お任せし、私自身は手続きなどもいたさななのであります。

なんとも、私としたことが愚かな手抜かりで、十七日に至り、『獄中病死の者あれば早々届出ぬか』との御目付からの

お咎めがきたとき、私は血の気の引くのを覚えました。念の為、御目付配下の者に密に<sup>ひそか</sup>問い合わせますと、中川様からの病死者の届けは言うに及ばず、三名処刑についても御目付様は一切、ご存知なかった、と申します。

してみると、三名暗殺はじつは、ご重役方の意見一致の結果でも殿御一人の御命<sup>ごよめい</sup>でもなく、中川奉行様と富山御家老様との内輪話の結果にほかならず、中川様の傀儡として直接手を下したのは私、ということになる、と、狼狽いたしました」

利兵衛はすぐ中川邸に走った。だが会えない。

奇兵隊はすでに十日に山口を制圧し、二十二日には萩へ進撃を開始、萩城にあった宗藩主は俗藩主は俗論政府を解散させて山口へもどり……と状況はめまぐるしく動いて、二月に入ると、藩内はもはや正義派一色の天下となっていた。徳山がそうなるのも遠い先のことではない、とみたのであろう、中川奉行は病と称して自ら邸を閉じてしまったのである。利兵衛が指示をうけようにも、なんの連絡もつかなかった。

「三月初め、<sup>とんだ</sup>富田新町に布陣する奇兵隊の支隊、山崎隊の隊士が詰所になだれこんできたとおもうと、有無をいわさず私を捕縛、連行し、三名の囚人暗殺真相を述べよ、と、数回にわたって苛酷な訊問をうけました。

中川様引きこもり中ではあり、私は極力、口を緘しておりましたが、そのうち、死骸引き渡しをうけた御家内様方の証言もあり、かつ、訊問は白刃林立する中に行われ、一言の

抗弁も許されず、口を開けば打撃打擲はなはだしく、『頭と、口書爪印に必要な右手だけを残して、あとは全身の骨という骨をバラバラにしてやる』と手はじめに右足を折り、髻をかたく切られるにおよんで恐怖たえ難く、ついに詳細白状いたしました」

と、そこで言葉を切った利兵衛はうなだれて、涙を流した。

「すると、さらに殴る、蹴る、の暴行で、だんぶくろは着ておりましても野盜、野伏りのごとき無法、荒々しさで、徳山の藩兵などあれに比べれば鎧を着た武者人形に他なりません。隊士一同笑いつつ、私を囲んで、かくの通りでございませぬ」

利兵衛は両手を突いて奉行に見えるよう向きをかえ、囚衣を肩から落した。その背中いっぱい、まだ生なましい真赤な傷痕が走っていて、目をこらすと「天」の字の形になっている。つまりは「天誅」の「天」の字、「私を新刀の様物にしたのであります」。

白州にいる者の間にどよめきが走った。書役さえ手を止め、目に同情の色を浮かべて利兵衛の背中の天の字の彫り物に見入った。様物とは、ふつう死骸を斬るのである。それを、隊士たちはいずれ死罪になるとみて、利兵衛を生きながら慰み物にしたのであった。

「かような辱めを受けるなら、あるとき首を刎ねられた方が……」といいながら、利兵衛は立ちあがり折れた右足をみ

せようとして、たちまち砂上に倒れこんだ。

利兵衛には疲れが濃く出ていた。朝からえんえんと取調べにに応じてきて、もう今は檻樓を丸めてそこに置いたような姿となっている。

利兵衛は一杯の水を乞うた。しかし、奉行はそれを許さなかった。

奉行は訊問をつづけて仮借なかった。

「右三名の者始末ののち、中川前奉行より賞美が出たであらう」

「その事実はありません。中川様は寛どのに四両一步渡され、岩津琢磨に先日の薬味代としてそのうち三步二朱つかわせ、とのことで、あとの三両一步二朱は八名の牢番に分配された由で、私はこれに関わっておりませぬ」

「では、ここにある三步二朱の請求は、何に充てたものじゃ」  
「棺桶代三箇分であります」

ちょうど私捕縛される前日、三名の死体を掘り出し、遺族の方へお渡しいたしました。もとより、縊ったことは死体を見れば明白でありまして、そのため私は山崎隊の者にあたかも鬼畜のごとく憎まれたのでございます」

「利兵衛」

奉行は委細洩らさず申し述べよ、と命じておる」

「と申されましたも……」

「覚えがないと強弁するか」

「はっ。四月末にじつは、中川様の後任のお奉行代理の方から、金二百疋びきの御切紙きりかみを頂戴したことから、覚えがございます」

「それ見よ。金を受け取っているではないか」

「恐れながら…それは、暗殺賞美とはつゆおもわなんだため、頂戴したのであります」

「では、なんの賞美じゃと言いたてるか。同役ほかに居るにかかわらず、その方のみ格別骨を折りしゆえの賞美であるうが。さきほどその方は、暗殺を宰領したのは同役 脇田文左衛門であると申し立てたが、宰領したのはその方であろう。その方は、僅かの金で三名の命を売り渡したのじゃ」

全くもってそれは見当違いというもの…と利兵衛は、乾いた唇をなめた。

引き籠りの中川奉行は、いずれ仮病じゃと噂され、日夜の区別なく獣の放吼に似た奇声が邸の外まで聞えるようになって、あれも芝居か、と嘲笑を買っていたが、三月末にふいに狂死してしまった。精神錯乱ということであった。

時をおかず後任の奉行代理は利兵衛を呼んで、「すべては、前任の中川脩人一存でなしたと心得よ」と、口裏談合をもちかけてきた。自分が中川奉行の右腕として七士殺害に関わったことも、最後まで指示をしつづけた富山家老のことも消して、「すべて」中川奉行の一存だったとすると奉行代理はいい、利兵衛もその言うところがよくわかっている、富山

家老から出たであろう切紙をうけとった。細い紙片に記された数字は金二百疋、(註、大雑把に見積って時価五万弱)。

あれは暗殺賞美代でなく、私への口止料なのだ、と利兵衛はおもった。

「再度のお尋ねにつきましては、私の心得違いにより、ついうかど頂戴してしまいました、とより申しあげようがありません」

「つかと、のう。では三名の囚人暗殺した代償として賞美頂戴の件、その方は承認いたすのじゃな」

利兵衛はこれをきいて長い間、黙って瞑目していた。ために、書類には、「承認する」と記録された。

奉行は姿勢を改めた。

「三名の囚人の毒殺暗殺始末、かくのごとき例はわが藩にあっては御法これ無く、上役よりの申し付けとはいいいながら容易にお受けできることではない。不届至極である。

この段いかが相心得るや、申したき儀あれば聞いてつかわす」

「恐れ入り奉ります。

繰り返し申し述べましたごとく、私も種々お断り申したのですが、前奉行様に、自分の命令はすなわち御家老の命令、御家老の命令は殿御一人の御命ごめいである、といわれては恐れ戦おのいて従わねばならず、断れば、お役目限りとなって妻子路頭に迷うは必定でありますので、不義とは知りつつ余儀な

く相勤めました。空怖しきことでありました。その点、重々、恐れ入っております」

そう述べてきた利兵衛は、たいていの囚人がいう、ご存分のご処置をと、寛大なお裁きを、ともいわず、氣力をふるって、

「新宮浜にて三人の殺害に立会いたしましたるとき、これは断じて、殿御一人の御命による正義などではなく、殺人じゃ、との思いが刻まれました。

三名の方々を僅かな金額で売った覚えはいささかもありませんが、命を助けようと心を砕きながら果せなかったのは、つまりは何もしなかったに同じ、殺人に加担いたしました私の罪は償わねばならぬとおもっております。

お奉行様には、私の申すこと最後までお聞き届けてください、まことにかたじけなく、これで捕縛以来の胸の悶えが下りました。」

と、利兵衛はふかく平伏した。

長い取り調べは終わった。

立ち上ってから奉行は、「利兵衛」と呼びかけた。今まではすっかり違う声音であった、この明るい声で奉行はいった。

「足をいたわって過せ」

宗藩の介入もあって、徳山俗論政府がようやく更迭されたのは、その年の五月。挙藩一致して幕府の長州征伐軍にあたらねばならない状態であったから、追放された俗論派への懲罰は小範囲に止められた。

富山家老と側用人は、山口の獄舎に終身幽閉、のち宥されたが、家老はコレラにかかって死亡した。

他に数名閉門、数名遠島。

中川侑人のみは死後とはいえ、家柄没収のうえ士籍剥奪という重い処分、すべての罪を一身に被った。

もちろん軽輩にいたっては軽い処分ですんだ。利兵衛にもお咎めはなかった。おもうに、利兵衛はたぶん、徳山の地でないところで余生を送ったことであろう。

完

二〇二七、三

あとがき

いまも眼前に浮ぶのは五十年前の徳山、萩や長府に似た城下町のたたずまいを濃く残していた当時の徳山である。武家邸の土塀がっ

づき、塀のなかに夏蜜柑の木が芳しい白い花をつけ、人氣のない砂地の道を歩いていると、どこからか琴の音もひびいてきた。

日本中にまだ敗戦の荒廃が深かった故か、この徳山の、穏やかな旧秩序の名残りは私につよく訴えるものがあつた。私の故郷は、生れそだったあの海峡の町でなく、ほんとはこの地だったのではないか、と思つた。私の実家は代々、徳山藩士であつたから、いつてみればここは父祖の地、曾祖父もその父もこの風景のなかで一生を了えた、と考えれば、このただならぬなつかしさも、血のさせるものといえる。そうして考えているうち、知らぬ間に百年の時を遡行して、氣付くと私は、徳山藩の幕末の時代に立っていた。

徳山藩には二つの歴史的事件があつた。

一は、宗藩による改易ののち、一人の立派な家老の奔走によって再興できた件。

二は、藩が消滅する直前の、思想的抗争。

私が書こうとしたのは、この二の方であつた。

資料は「浅見安之丞獄中記」、「河田佳蔵獄中記」などあつたので、調べて百二十枚のはじめでの歴史小説「晝闇」をかいた。それは評判がよかつたので、次に、「検断 国光利兵衛取調書」をもとに、三十枚をかいてみた。この資料は、私の作中の河合奉行、つまり河合家ご子孫につたわっていたものである。原文の味を生かすために改行を少なくし、ベタにかく工夫もしたが、手応えがわるかつたので筐底に入れたままになつてた。稿了は昭32、6、22となつてゐる。

今回、入院する破目となり、この旧稿をリメイクしてみた。稿了して、平14、7、7と日付を入れて氣付いたのだが、「晝闇」から「取調書」まで、断続はしているものの、四十年の歳月が経過していることに驚いた。これは、私が小説をかき始めて以来の年月とはば重なる。

そんなにも長い間、私は徳山藩（日本中のどれだけの人が三万石のこの小藩のことを知っているだろう、いま徳山に住んでいる人も知らないであろう）とつきあつてきたが、国光利兵衛をかいてしまつた今、もう何も書くことがなくなつた。藩士の名前も、出会えば「おお、まいふれんど」とおもわず口走るぐらい馴染んだが、すべて忘れよう。邸割図も官僚組織図もすべて記憶から消去しよう。五十年前、私を手招きしたこの町も、優雅なたたずまいは幻影にすぎなくなり、今あるのは見知らぬ町なのだから。

それにしても病氣は人生についての考察を強いる。

おもえば長い間、私は文学偏重の偏頗な生き方をしてきた。資料を漁るに精一杯の視力は、教養としての読書を許さなかつた、いつも何かに追い立てられていて、つれあいが「めし」といつても、「あと、あと」と声を荒げたりもした。これでよかつたのだろうか、文学の崇高さについてはいささかの疑いもないが、私の能力がそれに価したかどうか、徳山藩の蜃気楼が消えたいま、考えてみるべき時機かもしれない。